退職記念論文集

冒険

派文学を読み解く

9784755302992

1923098030003

ISBN978-4-7553-0299-2
C3098 ¥3000E

定価［本体3,000円＋税］

西山清先生退職記念論文集

知の冒険

イギリス・ロマン派文学を読み解く

市川　純・伊藤健一郎・小林英美・鈴木喜和・直原典子・藤原雅子　編

音羽書房鶴見書店

西山清先生退職記念論文集

Festschrift for Professor Kiyoshi Nishiyama

知の冒険

イギリス・ロマン派文学を読み解く

市川　純・伊藤健一郎・小林英美
鈴木喜和・直原典子・藤原雅子
編

音羽書房鶴見書店

西洋古典文学研究会論文集

知の冒険

イギリス・ロマン派文学を読み解く

市川　純・伊藤健一郎・小林英美
鈴木喜和・山原典子・藤原雅子
編

音羽書房鶴見書店

目　次

はじめに ……鈴木 喜和　i

I

"Young Poets":
John Keats, Leigh Hunt, and "To Autumn" ……Nicholas Roe　2

"A damp, drizzly November in my soul":
Some Notes on Romantic Melancholy and Travelling (Maritime …
Peripatetic), for Nishiyama-san ……Christoph Bode　23

About Mrs Christina M. Gee, the last curator of Keats House …..　35

Keats, Zimmerman, and the Sympathetic Solitude
……Yoshikazu Suzuki　36

A "Melancholy Grace":
Endymion and Keats's Creative Powers of the Imagination
……Hiroki Iwamoto　55

II

『美術年鑑』とロマン派文学
西山《学》へのオマージュとして ……笠原 順路　80

歌い継がれる「つれなき美女」
歌曲に翻案されたキーツ詩の最初の事例 ……小林 英美　90

「イザベラ」における愛・身体・労働 ……藤原 雅子　110

「レイミア」における交錯する視線 ……田中 由香　122

チャップマン訳のホメロスの読書体験がキーツにもたらした発見
読書行為の断片性 ……伊藤 健一郎 137

キーツと自然科学
『エンディミオン』に表出された「強烈さ」 ……鳥居　創 152

III

ドイツ神秘主義とサミュエル・テイラー・コウルリッジ
コウルリッジによるヤコブ・ベーメの解読、その共感と批判
……直原 典子 170

『女性の虐待、またはマライア』における精神病院……市川　純 190

「マイケル」における未完成の羊囲いの意味
ワーズワスのステイツマン像に見られる「土地を継承する感覚」
……大石 瑶子 206

エリザベス・ギャスケルの『シルヴィアの恋人たち』における
ロマンティシズムの探求 ……木村 晶子 221

トマス・ムーア『アイリッシュ・メロディーズ』の両義性
「息の詩学」とヤング・アイルランドからイェイツへの影響 …及川 和夫 236

顕微鏡的博物学とシャーロット・スミス
『詩の手ほどきについての会話集』(1804) を中心に ……鈴木 雅之 254

西山清先生略歴及び業績一覧 …… 273
編集後記 …… 277
英語論文索引 …… 279
日本語論文索引 …… 283
論文執筆者一覧 …… 295

CONTENTS

Foreword…… SUZUKI Yoshikazu i

I

"Young Poets":
John Keats, Leigh Hunt, and "To Autumn"……Nicholas ROE 2

"A damp, drizzly November in my soul":
Some Notes on Romantic Melancholy and Travelling (Maritime Peripatetic), for Nishiyama-san ……Christoph BODE 23

About Mrs Christina M. Gee, the last curator of Keats House 35

Keats, Zimmerman, and the Sympathetic Solitude
…… SUZUKI Yoshikazu 36

A "Melancholy Grace":
Endymion and Keats's Creative Powers of the Imagination
…… IWAMOTO Hiroki 55

II

Annals of the Fine Arts in Its Grecian and Haydonian Context:
To Professor Nishiyama and His Disciples with Respect and Love
…… KASAHARA Yorimichi 80

Regeneration of "La Belle Dame sans Merci" in the World of Music: A Victorian Adaptation by C. V. Stanford
……KOBAYASHI Hidemi 90

Love, Labour, Body in "Isabella"…… FUJIWARA Masako 110

The Interplay of Various Glances in "Lamia"..... TANAKA Yuka 122

Reading as a Fragment:
Keats's Reading of "Chapman's Homer" ..... ITO Kenichiro 137

Keats and Science:
"Intensity" in *Endymion* ..... TORII So 152

III

German Mysticism and Samuel Taylor Coleridge:
Coleridge's Reading of Jakob Böhme..... NAOHARA Noriko 170

The Mad-House in *The Wrongs of Woman: or, Maria*
..... ICHIKAWA Jun 190

The Significance of the Unfinished Sheepfold in "Michael":
A Feeling of Inheritance ..... OISHI Yoko 206

Elizabeth Gaskell and Romanticism in *Sylvia's Lovers*
..... KIMURA Akiko 221

The Ambiguity of *Irish Melodies* by Thomas Moore:
The Poetics of Breath and its Influences on the Young Irelanders
and W. B. Yeats ..... OIKAWA Kazuo 236

Microscopic Natural History and Charlotte Smith's *Conversations Introducing Poetry* (1804) ..... SUZUKI Masashi 254

Professor Kiyoshi Nishiyama's Brief Curriculum Vitae
and Research Results 273
Editor's Postscript 277
Index 279
Contributors 295

凡例

1. 本書の書式は、原則として『MLA 英語論文執筆者への手引き』(*MLA Handbook for Writers of Research Papers*) 第 7 版 (New York: Modern Language Association of America, 2009) に拠った。日本語論文に関しては、日本語表記に対応するための改変をしたうえで適用した。
2. 一次、二次資料を問わず、出典は原則として引用文末尾もしくは本文中の括弧内に該当ページ（詩の場合は行数）を記すことで表示した。
3. 本書での「イギリス」は、国名 The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland を指し、各地域については、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドとして、区別して書いた。

『美術年鑑』とロマン派文学

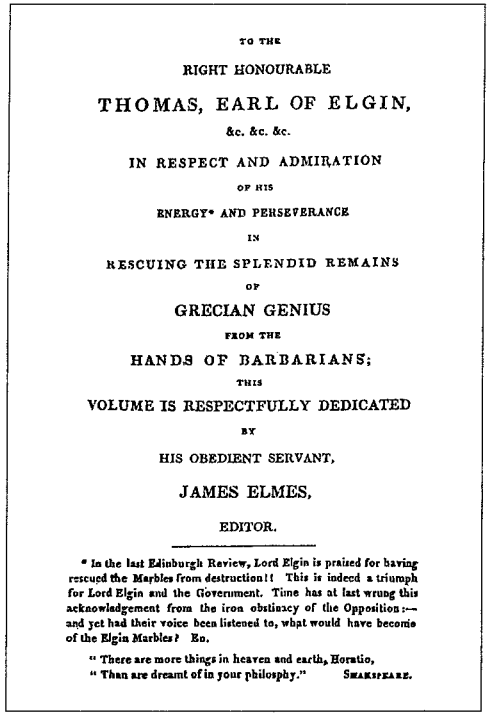
西山《学》へのオマージュとして

笠原　順路

18 世紀末から 19 世紀初頭にかけてのロマン派の時代には、二つの全欧規模の美術品の大移動があった。時代順にいえば、一つ目として、共和政フランスによって欧州各地（とりわけイタリア）から、絵画や彫刻など世界一級の美術品が戦利品としてルーブルに集められ、そしてナポレオン没落後にそれらの多く（但し全部ではない）がもとに戻っていったことが挙げられる。二つ目は、トルコ駐在の英国公使、第七代エルギン伯トマス・ブルース (Thomas Bruce, 7th Earl of Elgin) が、アテネ（当時はトルコ領）にあるパルテノン神殿破風の装飾彫刻をロンドンに持ち帰った、または略奪したことである。

筆者はかねがね、この時ローマとパリの間を往復した一つ目の移動に参与した《瀕死の剣闘士 (*The Dying Gladiator*)》、別名《瀕死のガリア人 (*The Dying Gaul*)》に関して色々と考えてきたのだが、数年前に畏友の西山清氏がこの二つ目の移動に関する畢生の大著『イギリスに花開くヘレニズム――パルテノン・マーブルの光と影』を上梓され、我々二人のやっていたことが、奇しくも車の両輪のようにして、ロマン派の時代の美術品の大規模な移動を背景とした文学研究になっていたことを知って、嬉しく思った次第である。

しかしながら、かつて筆者は 1999 年に本の友社から『美術年鑑』(*Annals of the Fine Arts*) の復刻版を出し、その別冊の解説として一文を草し、ロマン派文学的観点から同誌の価値を論じ、今後のキーツ研究への提言をしたこともあった。これは、先の二分類でいうなら、後者の美術品の移動（厳密には、受け入れ）にかなりのページを割いた雑誌である。今般、西山清氏が早稲田を去られるに際し、友人や弟子らが集い、論文集を出すと聞き、この昔


TO THE
RIGHT HONOURABLE
THOMAS, EARL OF ELGIN,
&c. &c. &c.
IN RESPECT AND ADMIRATION
OF HIS
ENERGY* AND PERSEVERANCE
IN
RESCUING THE SPLENDID REMAINS
OF
GRECIAN GENIUS
FROM THE
HANDS OF BARBARIANS;
THIS
VOLUME IS RESPECTFULLY DEDICATED
BY
HIS OBEDIENT SERVANT,
JAMES ELMES,
EDITOR.

* In the last Edinburgh Review, Lord Elgin is praised for having rescued the Marbles from destruction!! This is indeed a triumph for Lord Elgin and the Government. Time has at last wrung this acknowledgement from the iron obstinacy of the Opposition:— and yet had their voice been listened to, what would have become of the Elgin Marbles? Ed.

"There are more things in heaven and earth, Horatio,
"Than are dreamt of in your philosphy." SHAKSPEARE.

図版 1
『美術年鑑』第 3 巻の内扉

の一文を同氏に西山《学》へのオマージュとして捧げ、且つ、西山門下生の皆さんに、その時に筆者がした（若干、古いものの、いまだにその価値は失われてはいないと自負する）今後のキーツ研究への提言を、贈ることにする*。

*以下、1999 年の別冊解説の本文と注を原則としてそのまま（但し若干、不正確な箇所を修正したり、引用を和訳とするなどこの論文集の投稿規定に合致させるための変更を加えて）転載する。但し、図版に関しては、一部割愛した。転載をご快諾いただいた阿部洋子氏、および旧稿のデータ化にご尽力頂いた直原典子氏に感謝する。

*　　*　　*

キーツの研究家で『美術年鑑』(*Annals of the Fine Arts*) の名を知らない者はいないはずだ。「ナイチンゲールに寄せるオード」(“Ode to the (sic)

Nightingale")[1] と「ギリシア古瓶について」("On a Grecian Urn") という、キーツの最も著名なオードが最初に掲載された雑誌だからだ。

キーツとこの雑誌の関係については、すでにイアン・ジャック (Ian Jack) の『キーツと美術の鏡』[2] という古典的名著があって、私も今回この「解説」を執筆するにあたって、まずこの本を読み直してみた。そしてその後で『美術年鑑』のページをめくってみて、一方でイアン・ジャックの精緻で明晰な論述に感心しながらも、また一方でその説明が必ずしも実物を同じ縮尺で綴ったものではないという点が少々気になった（無論イアン・ジャックにそうしなければならない義務もないのだが）。

一言でいって、実物ははるかに政治的色彩が濃い、ということだ。その政治性とは、ジョージ・アラン・ケイト (George Allan Cate) の解説でおおむね間違っていない。[3] つまり、第一にエルギン・マーブルの推奨運動、第二に歴史画復権の運動である。厳密に計算したわけではないが、総ページ数の優に二割を超えるページがこの主張に何らかの点で関係した記事によって占められている、と言ってさしつかえない。本稿では、上記イアン・ジャックとジョージ・アラン・ケイトの論を踏まえながらも、彼らの指摘していない点を多数おりまぜ、私なりの『美術年鑑』の解説を試み、さらに、本誌が今後のキーツ研究にとって如何なる展望を開きうるかを述べてみたい。

*

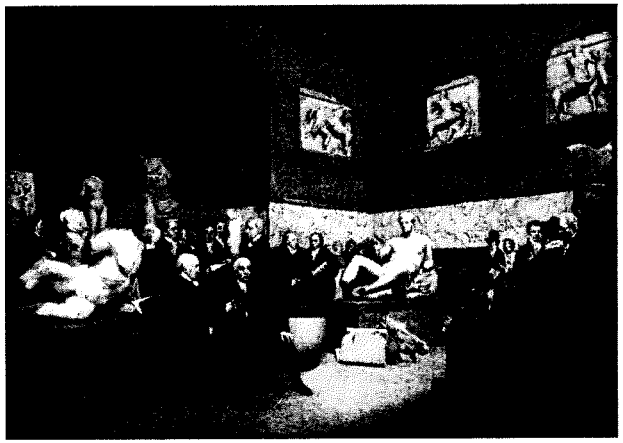
トルコ駐在の英国公使、第七代エルギン伯トマス・ブルース (Thomas Bruce, 7th Earl of Elgin) が、アテネ（当時はトルコ領）にあるパルテノン神殿の装飾彫刻を持ち帰った、または、略奪したことについて、近年その是非をめぐる議論が再燃しているのは、改めて言うまでもないことだろう。[4] 『美術年鑑』の第一の使命は、時の英国政府がエルギン・マーブルを購入し、それを美術教育に活用させるよう関係各方面に働きかけることにあった。イアン・ジャックも引用しているところだが、重要な点なので重複を恐れずに記せば、第1巻と第3巻の内扉の献辞には、それぞれこうある。

【第1巻】
ここに『美術年鑑』第1巻を、エルギン・マーブルの価値を正当に評価し、購入を議会に推挙し、その祖国の歴史において一時期を画したところの、下院の特別委員会諸兄に、敬意と謝意をもって献ずるものである。

【第3巻】
ギリシアの才を示す秀逸なる遺物を野蛮人の手から救出し給うたエルギン伯爵、トマス卿閣下の熱意と忍耐に対し、尊崇と驚嘆の念をもって、本巻を捧げる。閣下の従順なる僕たる編者ジェイムズ・エルムズ。

このエルギン・マーブル関係の記事で面白いのは、何といっても下院特別委員会および上下両院本会議における美術界関係者の発言の要旨が載っていて、当時の美術界最大の関心事がさまざまな文化史的観点から論じられている点だろう。因みにエルギン・マーブル賛成派の主な顔触れは、当のエルギン卿、ジョン・フラックスマン (John Flaxman)、トマス・ロレンス (Thomas Lawrence)、ベンジャミン・ウェスト (Benjamin West) ら、反対派はリチャード・ペイン・ナイト (Richard Payne Knight) である。キーツの二編のソネット「ヘイドンへ、エルギン・マーブルを見て書いたソネットを添えて」("To Haydon. With a Sonnet written on seeing the Elgin Marbles") と「エルギン・マーブルを見て」("On seeing the Elgin Marbles") が第8号（第3巻所収）[5] に作者の実名入りで掲載されたのもこうした文脈を考えてみる必要があるだろう。[6] その文脈とは、しかし、所謂エルギン・マーブルだけの文脈ではない。『美術年鑑』のページをめくっていると、第二第三のエルギン・マーブルの存在にも気づき、古代志向、考古趣味、廃墟趣味などのない混ぜになった当時の空気——これを要するにロマン派的雰囲気——というものが感ぜられてくるのだ。一例を挙げよう。ヘレニズムの復興に貢献のあったジェイムズ・ステュアート (James Stuart) とニコラス・リヴェット (Nicholas Revett) の共著『アテネの古代遺跡』(*The Antiquities of Athens*, 4 vols., 1762–1808) の出版で知られるディレッタント協会 (The Society of Dilettanti) は、最終

巻の出た1808年以後も積極的な活動をしていたということが第10号所収の「ディレッタント協会、イオニア調査委員会報告」("Report of Ionian Committee of the Society of Dilettanti") という記事によってわかるし、第10・第11号連続掲載の「メムノーン像頭部とおぼしき巨大石片、アフリカより大英博物館へ到着」("Arrival of a Colossal Head, said to be of Memnon . . . from Africa, at The British Museum") という記事を読めば、これがパーシー・ビッシュ・シェリーのソネット「オジマンディアス」("Ozymandias") の契機となった出来事だということが分かる。また、考古学協会 (The Society of Antiquaries) の会員で、ワーズワスが初めてワイ河岸を訪れたのと同じ頃に、ティンタン修道院 (Tintern Abbey) をはじめとするウェールズの遺跡を考古学的・美術的に調査したリチャード・コルト・ホーァ (Richard Colt Hoare) が、実は、『美術年鑑』への常連投稿者で、第4号の巻頭論文「英国美術学会理事の言動について」("On the Conduct of the Directors of the British Institution . . .") で時の美術界の動向批判をしたのをはじめ計六編の論文等に健筆をふるったということを知ると、これまで私の知っていたロマン派地図の間隙がまた一つ埋められたような気になる。



図版2　アーチボールド・アーチャー (Archibald Archer) 作
《エルギン・マーブル仮展示室　1819年》(*The Temporary Elgin Room in 1819*)
大英博物館所蔵

1768年に設立された王立美術院 (Royal Academy of Arts) の初代院長は、英国が生んだ最大の肖像画家ともいうべきジョシュア・レノルズ (Joshua Reynolds)。そしてその没した1792年、第二代院長の座についたのが、当時レノルズとは反対に歴史画や宗教画で名を上げていたベンジャミン・ウェスト (Benjamin West) であった。『美術年鑑』は、ウェストの主張する歴史画路線を擁護する雑誌でもある。第3巻「前書き」から抜粋してみよう。

> 我々の考えるところ、王立美術院は肖像画に、本来与えるべきでない重要性を与えているように思える。我々の考えるところ、歴史画こそが、国民国家 (the nation)、統治機構 (the government)、君主政体 (the sovereign) の目指すところであるべきなのだ。

この歴史画の復権という大義の主張に真っ向から取り組んだのが、キーツと親交の深かったベンジャミン・ロバート・ヘイドン (Benjamin Robert Haydon) や批評家・随筆家ウィリアム・ハズリット (William Hazlitt) である。彼らは、当時、急速に肖像画へと傾斜を強めていく王立美術院への批判、および王立美術院に対抗し歴史画を擁護する英国美術学会 (The British Institution) 支持、の筆を執った。例えばハズリットは、第10号の巻頭論文「ジョシュア・レノルズ卿の性格について」("On the Character of Sir Joshua Reynolds")[7] で辛辣な批判を展開しているし、ヘイドンは、第2・第3号において、王立美術院批判がもとで同院より追放されたジェイムズ・バリー (James Barry) なる画家を弁護する一文を、その初出掲載紙『イグザミナー』(*The Examiner*) より転載している。このジェイムズ・バリー自身は1806年に没しているのだが、『美術年鑑』ではその後第5・第6・第7号と、「バリーの幽霊」からの投稿が続き、王立美術院批判が展開されることになる。(ヘイドンとハズリットの投稿数の多さは本誌中、五指にはいる。)[8]

こうしたなか、歴史画復権運動の支柱ベンジャミン・ウェスト院長が1820年に八十一歳の生涯を閉じる。選挙によって選ばれた第三代院長トマス・ロレンスは、肖像画の名手であった。このことが、『美術年鑑』の廃刊

とどのような関係にあるのか、誌上では明確に述べられてはいない。ただ、同誌は、第16号でウェスト院長の葬儀の模様を詳しく報じると同時に同氏の回想録を載せ、トマス・ロレンスの王立美術院第三代院長就任を簡潔に記し、最終号の第17号で、まだ生存中のヘイドンの回想録[9]およびヘイドン会心の宗教画《イエルサレムに凱旋入城するキリスト》(*Christ's Triumphal Entry into Jerusalem*)[10]を讃えるラテン語の詩とその英訳を末尾に掲載した。同誌の主筆、建築家ジェイムズ・エルムズ (James Elmes) は、1820年刊行の第16・第17号をまとめた第5巻の「前書き」に次のように書いた——創刊当初の目的をおおむね果たした今、『年鑑』は本号をもって閉じることにする、と。この言葉が果たして額面通りに受け取れるものかどうか、私は知らない。ただ、最終巻第5巻の内扉献辞を見ると、そこには去り行く敗者が捨てるに捨て切れない一縷の期待が込められているように思えてならない。

> 『美術年鑑』の最終号は、ロンドン王立美術院に捧げる。近頃みられたる改善の兆候に敬意を表し、またこの改革が継続され、歴史画趣味の陶冶という、創設者たるジョージ三世閣下の御意が達成されることを願って——閣下の従順なる僕たる編者ジェイムズ・エルムズ。

初期のキーツは、リー・ハント (Leigh Hunt) 及びそのサークルと深く関係していたが、1816年の秋にヘイドンと会ってからは、徐々にヘイドンのサークルにひかれていく、というのが従来のキーツ研究の定説である。が、近年、キーツの非国教会的社会的背景を強調した伝記や作品解釈が多く見られるようになってきた。つまり、ハント対ヘイドンという大雑把な分類をするなら、ハント的立場からのキーツ研究である。アンドルー・モーション (Andrew Motion) の伝記やニコラス・ロウ (Nicholas Roe) の仕事もこの線上に位置づけることができよう。[11] と、ここまで書けば勘のよい読者はもうお分かりだろう。今後のキーツ研究の方向として欠くことのできないのが、ヘイドンらの社会背景を視野にいれた研究で、『美術年鑑』はその際の貴重な一次資料となるはずである。

しかし、それにもまして重要なことがある。こうして『美術年鑑』を通読してみると、どうも私には、キーツ後半における叙事詩的試みとその挫折——つまり「ハイピリオン」(“Hyperion”) と「ハイピリオンの没落」(“The Fall of Hyperion”) という新たなる神話創造への挑戦とその中断——が、『美術年鑑』が掲げた歴史画の復権という大義と1820年の廃刊という事実と、妙に重なって見えてきてならないのである。

『美術年鑑』は、二十五歳で逝ったキーツの実人生と同様、その名を水に書かれた美術誌だったのかもしれない。

注

1. 最も知られている題名 “Ode to a Nightingale” と “Ode on a Grecian Urn” はいずれも *Lamia, Isabella, The Eve of St. Agnes, and Other Poems* (1820) での題名。以下、本稿における作品名は『美術年鑑』における作品名とし、逐一 (sic) などとは記さない。
2. Ian Jack, *Keats and the Mirror of Art* (Oxford: Clarendon P, 1967).
3. George Allan Cate, “Annals of the Fine Arts,” *British Library Magazines* 2 (1983): 7–12.
4. 例えば次の各書を参照。
   William St. Clair, *Lord Elgin and the Marbles* (1967; Oxford: Oxford UP, 1998).
   Theodore Vrettos, *The Elgin Affair: The Abduction of Antiquity's Greatest Treasures and the Passions It Aroused* (New York: Arcade, 1997).
   Christopher Hitchens, et al, *The Elgin Marbles: Should They Be Returned to Greece?* (London: Verso, 1998).

   なお、近年は政治的公正を期して、「パルテノン・マーブル」という呼称も一部では用いられているが、本稿では『美術年鑑』の解説という性格に鑑み、当時の呼称「エルギン・マーブル」を用いることとする。
5. ジョージ・アラン・ケイトが第2巻と述べているのは誤り。同氏はさらに、本誌には索引がないと述べているが、これも誤りで、立派な索引が各巻末についている。
6. 最近の研究に Grant F. Scott, “Beautiful Ruins: The Elgin Marbles Sonnet in its Historical and Generic Contexts,” *Keats-Shelley Journal* 39 (1990): 123–50 がある。なお、“Nightingale” と “Grecian Urn” の方には作者の実名記載がない。私見で

は、この事実は "Nightingale" と "Grecian Urn" を論ずる場合、重要な意味を持ってくるように思える。

7. 初出は『チャンピオン』(*The Champion*) 1814 年、10 月 30 日、11 月 6 日号。無署名記事である。一方、『美術年鑑』では署名がある。ハウ (P. P. Howe) 編のハズリット全集を見ても、初出掲載誌の記載はあるが、その後その記事がどの雑誌に載ったかの記載はない。いわゆる版権が確立していなかった当時、一つの記事が世にでてから、どのような雑誌に採られていったか、そしてその際どのように形を変えていったかを調べるのも、面白いテーマかもしれない。

8. 因みに『ブリタニカ百科事典』(*Encyclopedia Britannica*) 第 4 巻・第 5 巻の補遺第 1 巻 (1824) の「美術」(Fine Arts) という項目はハズリットの筆による。

9. 本誌の慣例では、毎号、著名な物故者の伝記が載ることになっているが、その欄にヘイドンの回想録がある。

10. 宗教画とは、言うまでもなく、肖像画と対立するところの叙事的絵画であって、広い意味で、『美術年鑑』の主張する歴史画の範疇にはいる。

11. Andrew Motion, *Keats* (London: Faber and Faber, 1997).
Nicholas Roe, ed., *Keats and History* (Cambridge: Cambridge UP, 1995).
Nicholas Roe, *Keats and the Culture of Dissent* (Oxford: Clarendon P, 1997).

*　　*　　*

以上が 1999 年の拙稿である。肖像画対歴史画という対立軸ではないが、最近、西山門下生のなかには、ハズリットとキーツの言語観の近似性を詳述した研究も現れてきて*、これなどは、広い意味で「ヘイドンらの社会背景を視野にいれた研究」の一端と言えるかもしれない。

*伊藤健一郎『ジョン・キーツの美学を特徴づける言語観』(未刊行博士論文、2015)

とはいえ、歴史画、さらに叙事詩性の凋落は歴史の必然だったようだ。西山清氏は、『イギリスに花開くヘレニズム——パルテノン・マーブルの光と影』の結末部において、「イギリスにおけるヘレニズムは、人びとの意識の深みに根を下ろしたため、社会の表層にはむしろ限られた形で顕在するようになった」(157) と述べ、そのことの是非の判断は敢えて控えている。確かに西山氏の指摘する通り、パブリックスクールのカリキュラムや、ロンドンの街並みにおけるギリシア風建築様式にヘレニズムが受け継がれてはいるだろう、しかし肝心の美術の分野では、ヘレニズム藝術に特徴的な明瞭な輪郭線が、やがて印象派的な光の点にとってかわられることになるのである。

しかし、考えようによっては、その明瞭な輪郭線の喪失が、言語藝術を一層おもしろくしているという例もあるだろう。ほかでもない「ギリシア古瓶のオード」の結末部である。「誰が、何を、誰に向かって」語っているかがキーツ研究にとって永遠の謎であるのは——つまり、「美は真にして……」というアフォリズムの言語としての輪郭線が朦朧としているのは——壺のヘレニズム的輪郭線が、印象派的光の点に取って代わられようとしていることの、何よりの象徴のように思える。キーツの全作品中、最も人口に膾炙したこの句の難題に取り組む西山門下生の出現に期待したい。

2016 年 6 月 7 日脱稿

引用文献

Cate, George Allan. "Annals of the Fine Arts." *British Library Magazines* 2 (1983): 7–12. Print.

The Champion. Print.

Hazlitt, William. "Fine Arts." Supplement to the 4th, 5th, and 6th eds. of *Encyclopaedia Britannica*. 1824. Print.

——. *The Complete Works of William Hazlitt*. Ed. P. P. Howe. 21 vols. London: Dent, 1930–34. Print.

Jack, Ian. *Keats and the Mirror of Art*. Oxford: Clarendon P, 1967. Print.

Keats, John. *Lamia, Isabella, the Eve of St. Agnes, and Other Poems*. London, 1820. Print.

Motion, Andrew. *Keats*. London: Faber, 1997. Print.

伊藤健一郎『ジョン・キーツの美学を特徴づける言語観』未刊行博士論文、早稲田大学、2015 年。

笠原順路「『美術年鑑』とロマン派文学」、*Annals of the Fine Arts* 復刻版別冊解説、本の友社、1999 年。

西山清『イギリスに花開くヘレニズム——パルテノン・マーブルの光と影』丸善プラネット、2008 年。

Old Cumberland Beggar" 221–22
「兄弟」"The Brothers" 209
「グラスミアの我が家」"Home at Grasmere" 209, 219
『湖水地方案内』*A Guide through the District of the Lakes* 218
『抒情民謡集』(『抒情歌謡集』) *Lyrical Ballads* 207, 209, 237
「ヒナギクによせて」"To the Daisy" 264
「マイケル」"Michael, a Pastoral Poem" 206–20
「霊魂不滅のオード」"Ode: Intimations of Immortality" 150
ワッサーマン、E・R Wasserman, E. R. 121, 136

論文執筆者一覧（掲載順）

Nicholas Roe	Professor of English Literature, University of St Andrews, Scotland
Christoph Bode	Professor, Chair of Modern English Literature, LMU Munich
鈴木　喜和	日本女子大学准教授
岩本　浩樹	早稲田大学大学院博士後期課程在籍
笠原　順路	明星大学教授
小林　英美	茨城大学教授
藤原　雅子	早稲田大学非常勤講師
田中　由香	日本女子大学非常勤講師
伊藤　健一郎	早稲田大学非常勤講師
鳥居　創	早稲田大学大学院博士後期課程在籍
直原　典子	早稲田大学非常勤講師
市川　純	日本体育大学助教
大石　瑶子	早稲田大学助手
木村　晶子	早稲田大学教授
及川　和夫	早稲田大学教授
鈴木　雅之	宮城学院女子大学特任教授・京都大学名誉教授

In Quest of New Romantic Horizons:
Festschrift for Professor Kiyoshi Nishiyama

西山清先生退職記念論文集
知の冒険
——イギリス・ロマン派文学を読み解く

2017年3月31日　初版発行

編　者　市川　純／伊藤 健一郎／
小林 英美／鈴木 喜和／
直原 典子／藤原 雅子
発行者　山口 隆史
印　刷　シナノ印刷株式会社

発行所　株式会社 音羽書房鶴見書店
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-14
TEL 03-3814-0491
FAX 03-3814-9250
URL: http://www.otowatsurumi.com
e-mail: info@otowatsurumi.com

© 2017 市川純／伊藤健一郎／小林英美／鈴木喜和／
直原典子／藤原雅子

Printed in Japan
ISBN978-4-7553-0299-2
組版　ほんのしろ／装幀　吉成美佐（オセロ）
製本　シナノ印刷株式会社